

[パネルディスカッション]

# 海外へ行かないと グローバル人材に なれないのか？

## ーキャンパス内での経験を見直してみよう！

○**鹿目** では、次に進めさせていただきたいと思います。次はパネルディスカッションになります。ご登壇者の方、前のほうにお願いいたします。

さて、ここからは、パネルディスカッションに移らせていただきます。タイトルは、「海外に行かないとグローバル人材になれないのか。キャンパス内での経験を見直してみよう」です。ご登壇者をご紹介します。

まずは向かって右側、本日のパネルコーディネーターであります株式会社 Sociarise 代表、中村拓海様。

パネリストとしてご参加くださる本学卒業生、さくら日本語学校講師、益本佳奈さん。

立教大学社会学部現代文化学科 4 年、中内美沙さん。

立教大学異文化コミュニケーション学部 3 年、小西佐和子さんです。

ここで中村様についてご紹介いたします。中村様は国立大学法人東京外国語大学外国語学部南・西アジア課程にてウルドゥー語をご専攻され、2015 年に卒業されました。学生時代にパキスタンに 5 つの日本語学校をつくられ、2014 年、外国人に特化した人材サービス会社 Sociarise を創業されました。企業に対する外国人雇用のコンサルティングのほか、政府、自治体への多文化共生に関するご提言、難民の就労支援などにも積極的に取り組まれております。

では、中村様、よろしくお願いたします。

○**中村** ただいまご紹介にあずかりました株式会社 Sociarise 代表の中村と申します。もう、ここからゲストスピーカーの方に適宜振って大丈夫なんですね。そしたらちょっと、今、僕の紹介はあったので、さっそく話を、学生たちの学びに

ついて話を進めていきたいのですが、その前に、1個ちょっと感動したことがあります。そうですね、スライドを何か直していただきつつ場をつなぎます。

松井先生のお話の中でリベラルアーツの話があります。やっぱり知識としては自由七科を学びましょう。これはテストに出るので入学試験のときに知ってたんですけど、それが世界を知るためのすべであるという話を伺って、学校を卒業して社会人になって、こういうふうにやれば大体仕事うまくいきますよみたいな定められたところで安堵していた自分をちょっと恥ずかしく思って、ああ、昔の人は天文のこととか、算術、幾何、そういったことまで心の中の好奇心を向けて勉強してきたんだなとちょっと反省をしました。

今からお話を振っていきたいのは学生様が、じゃあ今、この学びの場である立教大学で、それぞれ異なるプログラムを通じてどんなことを勉強してきたのか。これのリアルな姿に迫っていきたいと思っています。私個人の懸念としては、話を聞くのがすごい好きなので時間内にちゃんと収めるようにすることだけ気をつけます。学生の皆さん、楽しくおしゃべりしてください。

## ■パネルディスカッション①

# 日本語クラスの TA活動を通して

本学卒業生、さくら日本語学校教師  
益本 佳奈 氏



○中村 ということで、一番最初のゲストスピーカーですね。TA活動をされてきた益本さんに話を振りたいと思います。大丈夫そうですか。音声とか大丈夫ですか。

○益本 はい、大丈夫ですか。

○中村 クリアですね。そしたら本編、お願いします。

○益本 はい。では画面シェアさせていただきます。それでははじめさせていただきます。先ほどご紹介いただきました、立教大学異文化コミュニケーション学部卒業生で、現在、ポーランドにあります Fundacja SAKURA 日本語学校で日本語教師として働いております益本佳奈と申します。私のほうからは、学部時代に経験をしました日本語クラスのTA活動を通して、私が学んだこと、困難に思ったことなどを皆さんにシェアさせていただきます。【スライド③-1】

まずは最初に、私が参加いたしました日本語クラスのTA活動について簡単にご説明いたします。1年、半年の短期留学生や正規留学生が履修する日本語のクラスでのアシスタント業務になります。私がこの活動に参加した経緯としましては、高校生の頃からずっと日本語教師を目指していて、この活動を通して現場を知ることができるかなと思ひまして、活動に参加をいたしました。

大きくは中級クラス、上級クラスの2つのクラスを担当させていただきました。どちらも学生をサポートするという点では共通なんですけれども、中級のクラスでは、先生が添削された作文のフィードバックをPowerPointを使ってみんなにしていたり、あとは発表のお手本を見せたり、レジュメをつくってそれをみんなに見せたりしていました。あとは各大きいテーマがあるんですけど、そのトピックごとのイントロダクションを少しやらせていただく機会もありました。

上級クラスに関しましては、メインが、難しく長い読解資料の語彙の導入の部分がありました。あとは学生がディスカッションをする際の意見交換の場で少し参加をさせていただくということもありました。【スライド③-2】

こういったTAの活動から、まずは私は困難だったことを3点挙げさせていただきます。1点目はとてもシンプルなのですが、言葉選びの難しさです。学生がどの文法を知っていて、どの文法を知らないのかというのは私は当時全く分からなかったのが、学生が話していることとか、先生が使っている言葉とかを聞きつつ把握するのが難しかったなと思います。

2点目が、学生のクラスへの引き込み方ですね。語彙の説明をしたり、トピックのイントロダクションをやらせていただくに当たって、どうやったらこのトピックにとか、この語彙に興味を持ってもらえるのかなというのを工夫するのがとても難しかった印象です。

そして3点目が、2点目と少しかぶる部分ではあるんですけども、語彙の導入の際、分かりやすくというのはもちろん、授業外でも使えるような語彙の導入ってどんなものがあるんだろうと悩みながら準備をしたのを覚えています。具体的には簡単な言葉へ言い換えるというのはもちろんなんですけれども、どんな場面で使えるかというシチュエーションを提示するのも難しかったなと思います。

### 【スライド③-3】

一方で、この活動から私が学んだこと、大きく2点挙げさせていただきます。1点目は、クラス全体を見ていて、そして学生との交流を通して思ったことですね。クラスというものが日本語を介した異文化交流の場になっていうということに気づきました。トピックは日本に関する祭り、観光地などだったんですけども、そこで日本のことを学びながら、自分の国と関連づけて、ここは似ているね、ここは違うねというのを関連づけながら、それぞれ背景の異なる学生同士で話し合う、話ができるというのは貴重な場面だなと思いました。

そして2点目は、これは先生方の教室運営から学んだこととなります。授業での目標を達成するための道筋づくりをととても丁寧に行われているということに気づきました。例えば1つの祭りというトピックがあれば、それに対するつかみがあって、語彙のフォローをして、じゃあどんな祭りがあるか内容を理解して、それを基に自分で考えたりして、ディスカッションや発表するというフローがすごく丁寧に準備をされているので、学生も毎回の授業で、あ、今日はこれができ

るようになった、これができるようになったと、きちんとステップアップができるようなフローを準備されているのに気づきました。

以上のことから、私は今の日本語教師としてのキャリアでも生かしている学生が何を求めているのか、学生が何を学びたいのか、教師としての一方向の指導ではなくて、学生の目線に立って一緒に学ぶ姿勢というものを学べたかなと思っています。【スライド③-4】

短くはありましたが、以上で私からのご説明、終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○中村 益本さん、ありがとうございます。またこの後、深くちょっと聞きたいことがありますので、後ほどその時間を取ります。

○益本 はい。

【スライド③-1】



【スライド③-2】

## 日本語クラスのTA活動って？

- 短期留学生や正規留学生が履修する日本語のクラスでのTA（ティーチングアシスタント）

中級クラス	上級クラス
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 学生のサポート</li><li>・ 作文のフィードバック</li><li>・ 発表やレジュメのお手本</li><li>・ トピックごとのイントロ</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 学生のサポート</li><li>・ 読解資料の語彙導入</li><li>・ ディスカッション参加</li></ul>

【スライド③-3】

## 困難だったこと

言葉選び

どの文法や語彙が分かるのか把握すること

学生のクラスへの引き込み方

トピックに興味を持ってもらえるようなイントロ

分かりやすく、授業外でも  
使える語彙導入

簡単な言葉への言い換え、シチュエーション提示

【スライド③-3】

## 活動から学んだこと

クラスは日本語を介した  
異文化交流の場

日本の祭りや観光地について学びつつ、  
自国と関連付けながら意見交換ができる！

授業での目標を達成するための  
道筋づくり

トピックに関する掴み→語彙フォロー  
→内容理解→ディスカッション  
のフローを準備！



今のキャリアでも活かしている  
「学生の目線に立って一緒に学ぶ姿勢」を学べた

■パネルディスカッション②

## 日本語スピーチコンテスト 実行委員の経験から

社会学部現代文化学科 4年  
中内 美沙 氏



○中村 続きまして、日本語スピーチコンテストの経験についてですね。中内さん、それではお話をお願いします。

○中内 お待たせいたしました。それでは私の発表をさせていただきたいと思えます。先ほど少しご紹介してくださったのですが、私は立教大学社会学部現代文化学科4年の中内美沙と申します。【スライド④-1】2020年度には日本語スピーチコンテストの実行委員を経験させていただき、21年度には実行委員長を務めさせていただきました。本日はこの経験に基づいて少しお話をさせていただきます。【スライド④-2】

まず最初、日本語スピーチコンテストについて少し紹介をさせていただきたいのですが、正式名称は、「立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト～東京セントポールライオンクラブ杯～」という名前なんですけれども、少し長いので、今日はスピーチコンテストと呼ばさせていただきます。このイベントの対象は、立教大学の留学生の皆様が対象となっております、目的といたしましては、留学生の日本語学習の成果及び日本での経験を披露していただき、立教大学の日本人学生の皆様や様々な方との交流の機会の増加を図ることが目的とされています。【スライド④-3】

こちらに、実際に対面で行われていた際のスピーチコンテストの写真を貼らせていただきました。しかしながら、昨年度と一昨年度に関しましては、新型コロナウイルスの感染防止のために、オンライン開催となりました。私が参加させていただいた過去2回はどちらもオンライン開催のものでしたので、少しイレギュラーな環境下で行われたスピーチコンテストについてお話しさせていただきます。【スライド④-4】



それでは、私がこのイベントに関わった理由なんですけれども、大きく分けて2つございます。1つ目が、自分自身の本当に関心から参加を決意いたしました。私が今、社会学部で研究しているテーマの関心の中に、異文化体験が人々に与える影響というものがございます。実際に留学生の皆さんが異文化の中で生活する中で、どのようなことを経験されて、感じられているのか。実際にお伺いしたいと思い、参加を決意いたしました。【スライド④-5】

あともう一つが、私の言語習得に対する考え方から決意いたしました。言語習得の達成の指標の1つに、テストの点数がいいとか悪いとか、そういうものではなくて、自身の意見や意思をその言語で明確に伝えられるというものがあるのではないかなともともとと考えておまして、実際に皆さんに、自分の意思や意見を伝える練習にスピーチコンテストがなるのであればと思います、皆さんにその場所を提供できる一助になるのであればと思います、参加を決意いたしました。

それでは私がこのイベントから何を学び、気がついたのか、そしてまた困難だったのかということですが、まず1つは、オンライン開催による、交流の場としての機能の難しさというものがございました。通常の対面開催ですと、恐らく起こっていたであろう自然発生的な会話というものは残念ながら見受けられることはできませんでした。交流の場所としてクイズ大会というものも用意させていただいたのですが、そこで起こる会話というものも、全て台本に沿った機械的な会話にとどまってしまいました。それが私の悔いの1つでございます。

もう一つが、多くの文化、価値観を持つ人々が集まる場を組織する困難さということですが、昨年度で言いますと、10箇所の場所から12人の留学生の皆様が参加してくださいました。私、今、10箇所の場所と申し上げたんですけれども、こちらを10か国と申し上げられないというのも1つの例として挙げられるのではないかなと思います。これは言語教育というところにも少しかかってくるのではないかなと思います。言葉を教えるにしる、学ぶにしる、単語とか文法とか、表面上のものだけではなくて、全ての言語のその裏には文化や価値観というものが色濃く根付いていると思います。そこを理解して学んでいるからこそ、実際に言語を教えたり、また学んだりすることができるのではないかなと思います。【スライド④-6】

グローバル化が進む中で、様々な文化や価値観があるというものは当たり前のように思われてきているものかなとも思いますが、このような様々な方が集まる

場所においては、様々な文化や価値観があるということをきちんと理解をして、そしてそれぞれの文化や価値観をリスペクトする気持ちというものを忘れてしまっっては、みんなが気持ちよく有意義な時間を過ごせるイベントというものをつくるのは難しいのではないかなと、このイベントから感じさせられました。

短い発表になりましたが、ご清聴ありがとうございました。【スライド④-7】

○中村 中内さん、ありがとうございます。ちょっと聞きたいのが幾つも出てきたんですけど、ちゃんと絞って後で聞きますね。

【スライド④-1】

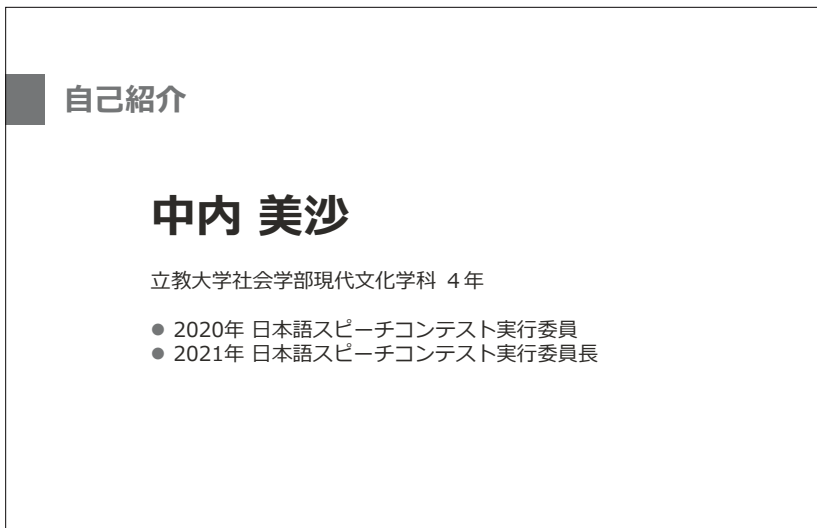


日本語スピーチコンテスト実行委員の経験から

.....

立教大学社会学部現代文化学科4年 中内美沙

【スライド④-2】



自己紹介

**中内 美沙**

立教大学社会学部現代文化学科 4年

- 2020年 日本語スピーチコンテスト実行委員
- 2021年 日本語スピーチコンテスト実行委員長

【スライド④-3】

## 日本語スピーチコンテストとは

- 【正式名称】立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト～東京セントポールライオンズクラブ杯～
- 【対象】本学の特別外国人学生、日本語科目履修中の正規学部生および正規大学院生
- 【目的】留学生の日本語学習の成果および日本での経験を披露していただき、本学の日本人学生等との交流の機会の増加を図る。（日本語教育センター、2021）。

【スライド④-4】

## 日本語スピーチコンテストとは



通常は会場での開催。2020年度・2021年度に関しては新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンライン開催。

【スライド④-5】

## 関わった理由

- 自身の関心から
  - 自身の関心の1つが「異文化体験が人々に与える影響」。
- 自身の言語習得に対する考えから
  - 言語習得 = 「自身の意見/意志をその言語で明確に伝えられる」

【スライド④-6】

## 何を学び気がついたのか、困難だったか

- オンライン開催による「交流の場」としての機能の難しさ。
- 多くの文化、価値観を持つ人々が集まる場を組織する困難さ。

【スライド④-7】

ご静聴ありがとうございました。

## ■パネルディスカッション③

## 日本語教育ボランティアを通して考える「日本語教育」の場

異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科3年  
小西 佐和子 氏



○中村 じゃあ最後、日本語教育のボランティア、これは日本語短期プログラムについて小西さん、お願いします。

○小西 ありがとうございます。先ほどもご紹介いただきました異文化コミュニケーション学部3年の小西と申します。今日は、私は短期日本語プログラムに参加して、実際に私自身、日本語教育というもののイメージがらっと変わったので、そちらについてお話しさせていただきたいと思います。【スライド⑤-1】

まず、どのようなプログラムだったのかというところですけど、立教大学日本語教育センターの活動の短期日本語プログラムというもので、先ほども紹介があったと思うんですけども、昨年の夏に私は参加させていただいて、やはりコロナの関係でフィールドワークとかは行われず、オンライン、Zoomで活動が行われました。私は大体、1週間のプログラム、2回あった中で3回ずつ、大体6回ほど参加をしました。

主な活動内容としては、ボランティアで入ったのもあって、ペアやグループでブレイクアウトセッションに分かれて、教科書に沿った会話の練習、お互いに自己紹介をして、質問をし合ったり、家族のことや、好きなものとか、趣味とか、そういう本当に会話の練習を一緒にさせていただきました。【スライド⑤-2】

参加した理由としては、日本語教育にまず関心があったというのがあって、異文化コミュニケーション学部のほうで幾つか日本語教育に関する授業も取らせていただいたので、実際に学んだことを生かす、実践する場が欲しかったので参加してみたというのと、オンラインで気軽に参加できたからというのもありまして、授業が空いている時間で結構参加できるようなプログラムだったので、個人的にはとても参加しやすかったなと思います。【スライド⑤-3】

学び、気づきのほうですね。まず1つ目が、異なる文化背景を持つ生徒さんとのコミュニケーションを通して、まず新しい文化というのもそうですし、私の自国の文化との共通点や相違点の発見があったと思います。

2つ目が、やはり日本語を学びたいと欲している生徒さんとの交流の場だったので、日本の文化とか言語にどのようなことに関心があるのかというのをすごい個人的に学べたなと思っています。【スライド⑤-4】

難しかったことなんですけれど、1つ目が自国の文化の説明、こちら先ほど学びのところで、どのようなことに関心を持っているかというときに、やはりアニメとか漫画とかに興味を持ってくださる生徒さんが多かったんですけど、私自身はあまりアニメとか漫画に対する知識がなくて、何かあまりそこで話をできなかったなというのがあったので、やはり当たり前になり過ぎていることとか、考えてもみなかったことを説明しようとするのがとても難しかったなと感じました。

もう一つが、生徒さんとの距離の詰め方、コミュニケーションの取り方、こちらはオンラインというのもあったんですけど、やはり最初入ったときに、どちらかという教える側と教えられる側みたいな関係性にどうしてもなりやすかったので、同等の立場でコミュニケーションを取るというのに少し時間がかかったかなと感じます。【スライド⑤-5】

全体を通して感じたことなんですけど、やはり言語を教える場というよりは、異文化交流の場、コミュニケーションの場というのがあって、もう一つが、生徒が背景に持つ文化観の知識や理解が必要ということです。最初は日本語教育と聞くと、やはり先生と生徒がいて、一方的なコミュニケーションのイメージが強かったんですけど、相手の文化とか背景を理解した上で、その人に合った様々な教え方というのがあるなと感じて、それをやはり実践していくのが大事なのかなと感じました。【スライド⑤-6】

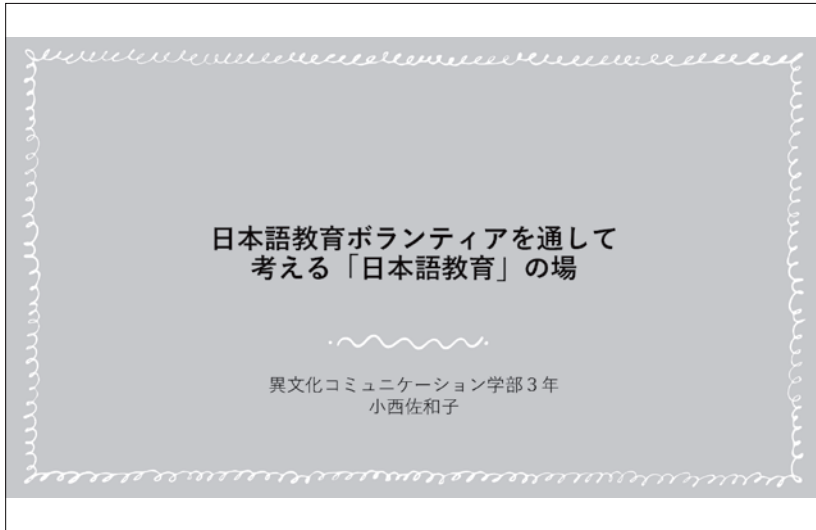
短い発表でしたが、ご清聴ありがとうございます。【スライド⑤-7】

○中村 小西様、ありがとうございます。席に戻られたら、お3方がやってきたことを僕のほうから質問を投げかけて、もう少し掘り下げていこうかなと思っています。

はい、着席されました。発表、皆さんありがとうございました。特にお2人は教授方の前で話をするという、学生とはとても思えないチャレンジをしたわけなんですけれども、ほんとお疲れさまでした。ここからちょっと楽しんでお話ししましょう。



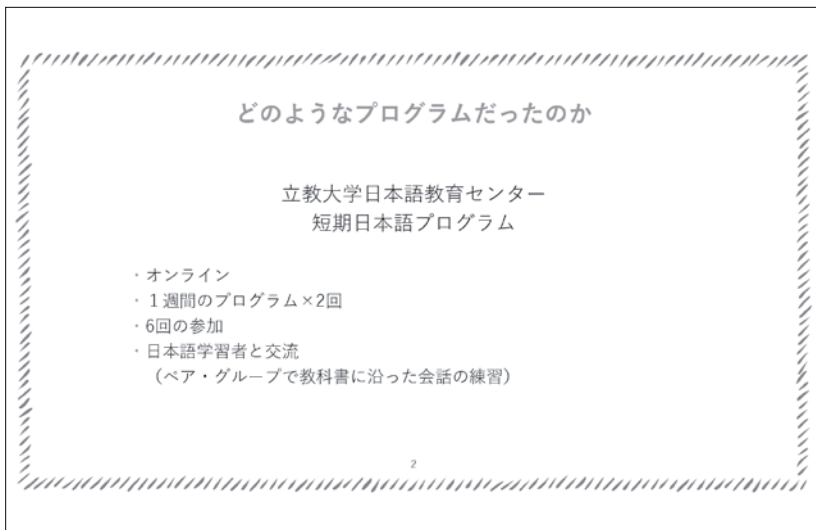
【スライド⑤-1】



日本語教育ボランティアを通して  
考える「日本語教育」の場

異文化コミュニケーション学部3年  
小西佐和子

【スライド⑤-2】



どのようなプログラムだったのか

立教大学日本語教育センター  
短期日本語プログラム

- ・ オンライン
- ・ 1週間のプログラム×2回
- ・ 6回の参加
- ・ 日本語学習者と交流  
(ペア・グループで教科書に沿った会話の練習)

2

【スライド⑤-3】

**参加した理由**

- 日本語教育に関心があったから
- オンラインで気軽に参加できたから

3

【スライド⑤-4】

**学び・気づき**

異なる文化背景を持つ生徒とのコミュニケーション  
→ 新しい文化・自国の文化との共通点や相違点の発見

日本語を学びたい！とってくれている  
→ 日本の言語や文化がどのように見えているか

4

【スライド⑤-5】

何が難しかったか

自国の文化の説明（知識不足）

生徒との距離の詰め方

5

【スライド⑤-6】

日本語プログラムのボランティアを  
経験して感じたこと

「言語を教える場」というより、  
「異文化コミュニケーションの場」

生徒が背景に持つ文化観の知識・理解が必要

6

【スライド⑤-7】



## ◇パネルディスカッション

○中村 最初にお話を聞きたいなと思っているのが、益本さん、聞こえます？

○益本 はい。

○中村 私もふだん、留学生に対してキャリアの授業をよくやるんですね。そのときに、何を教えなきゃいけないというのは事前に計画立てて、これ教えれば就活うまくいくよというのはできると分かりやすいのですが、学習者を引き込む、学生のクラスへの引き込み方は、ここはなかなか難しくて創意工夫しているところなんです。どうなんですか、実際、彼らにとっては外国語である日本語、この文脈でどうやって引き込むのか。また、何か最初は、ビフォー、こういうふうにあまりできなかったけど、経験を経て、今はこういうふうに取り込むことができている。何かこの辺りの話、聞かせていただけますか。

○益本 はい。ビフォーの部分で言いますと、今でも覚えているのが、「高度経済成長」という言葉を学生に教えないといけない場面があったんですけども、「高度経済成長」って、調べてしまえば、いつからいつまでで、どういうことが原因でというのは、学生もネットに情報があるので分かってしまうことですよ。ただ、そういうネットで分かっちゃうことって、クラスに来て学ぶようになったら、じゃあクラスでしか知り得ない知識というのをプラスで入れてあげないと、学生の学びにはつながらないなというのに最初私は気づいていなくて、本当に型にはまった教え方をしてしまったんですね。

ただ、その学生の反応を見て、あ、これは違うな、私やり方間違ってたなというふうに気づいたので、そこから、今のキャリアにもつながってますけれども、やっぱりどういう場面で使えるのか、その「高度経済成長」という言葉が、切り取って見て「高度」というのはこういうときに使える、「経済」そして「成長期」というのはどういうところで使えるというふうに、その言葉にとどまらず、言葉から派生した別の言葉を伝えたりだとか、どういう文脈で使えるのだとか、そういったものまで伝えていかないと、学生は、あ、これを授業外で使える言葉として身につけることはできないのかなと今は思っています。

○中村 ありがとうございます。今ちょっと話ががあったんですけど、教える側、指導者側が教えやすいことを教えるんじゃなくて、生徒と同じ立場に立って、学習者にとってメリットのあること、本当に学びたいこと何だろうと考えてカリキ

ュラムをつくる、で、授業を展開するから引き込めるという話だったと思うんですね。この学生の目線に立って一緒に学ぶ姿勢、これを体得するために、何か必要なプロセスとか、益本さん自身は何をきっかけとして、この学生目線に立って一緒に学ぶ姿勢が身についたとお考えですか。

○**益本** 最初は多分、1つ目は、1回自分で教えてみて、学生の反応が、うん？違う、自分が思っていたのと違うというのに気づいたことだと思います。2点目は、単純に自分の外国語学習を振り返ってみて、どんなふうに語彙を教えもらったら自分のものにできるかなというふうに学習者としての立場に一度立ち返ったことがきっかけになったかなと思います。

○**中村** ありがとうございます。ちょっともっと聞きたいんですけど、次の質問のところに移ってテンポよくいこうと思っています。ありがとうございます。益本さん。

○**益本** はい。

○**中村** 次、中内さん、お伺いしたいんですけども、オンライン開催でどっちもイレギュラーだったということじゃないですか。サーッと流れていったんですけど、そこにご苦労の様子がうかがえたんですね。もう少しこのオンライン開催したことの難しさ、大変さについて語っていただけますか。

○**中内** そうですね、やはりオンライン開催の欠点は、相手の顔が見えないというのがとても大きいと思うんですね。私はもちろんスピーチを発表する側ではなかったんですけども、留学生の皆様も、本来ですと、じゃあ自分の日本語が通じているのかなとか、この文法で通じたのかなとか、確認しながらできるはずな



のにできない点や、本当に、じゃあ司会進行をやっていた方々も多分、本当に皆さん、この進行でついてきているのかなというのが分からないというのは本当に大きかったと思います。しゃべらずとも、やはり感じてくるものが対面ですとあるんですけども、本当にそれがないというのは少し大きなデメリットなのではないかなと感じます。

○中村 ありがとうございます。もう一個お聞きしたいのが、この活動関わろうと思った理由が、異文化体験が人々に与える影響に関心を持っていたからということじゃないですか。実際このイベントを開いて、ご自身はどんな影響を受けたかと、この活動を通じて、参加していた留学生たちはどういう影響を受けたと思うか。この2つ、ちょっと教えていただけますか。

○中内 そうですね、この活動を通じて、やはり私自身が学んだことといえば、実際に、昨年度お話しをしてくださった方のエピソードの中に、日本語の中の、○○ちゃんとか、○○さんとか、呼び捨ての距離感が分からなくてというエピソードをお話ししてくださった方がいらっしゃったんですね。でもそういうのは、今、情報のグローバル化が進む中で、一か所にとどまっても、いろいろな情報も取れる、しかもITの発展によって、座学以上の経験をどこでもできるような世の中にはなってきているとは思うんですけども、やはり異文化体験をしなければ、異文化の中で生活をしなければ獲得できないものというのは、いつまでいってもあるんだなというものを私は皆様から学びました。

皆さん、留学生の皆さんが参加されて、恐らく得られたであろうものというのは、やはり私が先ほど少しお話しさせていただいた、自分自身の言語習得に対する考えということで、自分の意見を、なかなか友人と話す中で、きちんとまとめてお話しする機会というのは日本人の私たちでもない、日本人同士の会話でもあまりないと思うんですね、友人同士だと。それを、きちんと1つ文章をつくってお話しをする、そういうの実際の練習の機会によって、恐らく日本語に対する自信もついたと思いますし、これから先、いろいろな言語を学ぶにしろ、いろいろな応用が利くようなスキルというものが身についたのではないかなと思います。

○中村 ありがとうございます。何か Study じゃなくて Learn の感覚というふうに受けますね。外国語学部なので、そんなことが気になっちゃいます。ありがとうございます。

最後、小西さん。僕ちょっと小西さんは異なった角度でお聞きしたいなと思っ

ていまして、参加した理由を聞いてて、すごい純粹で真っ直ぐだなと思ったんですね。就活に役立つからこれやるとか、何かね、先輩に言われたから、仕方ねえやるかみたいな感じじゃなくて、日本語教育に関心があったから、内発的な興味で出ているし、何か忙しい中、オンラインで参加できる、だったら飛び込めるなということで参加されたじゃないですか。活動を終えた今から振り返ってみて、参加する前のご自身はどんな学生だったと思いますか。

○**小西** 大学一年生の頃は、コロナ禍でオンライン授業、そして上京してきたというのもあって、本当に家から出ずに何も挑戦する機会がありませんでした。異文化コミュニケーション学部に入ったからには、異文化体験のようなものをやったりしたいという気持ちもあって、何かに挑戦しなきゃと逆にちょっと焦っている気持ちもあったのかなと思います。何かに挑戦したい、新しい経験がしたいという気持ちがその時は強かったな、と今振り返ってみると思います。

○**中村** ありがとうございます。じゃあちょっと、異文化コミュニケーションの実体験の話、もう一個したいんですけど、さっき漫画、アニメのこと聞かれても、自分自身興味ないから答えられないと言ってたじゃないですか。どんなこと聞かれたのかということと、それ聞かれて、うん？ 分かんないってコミュニケーションが止まりそうになるわけじゃないですか。どういうふうに戻したんですか。

○**小西** どういうことを聞かれたか、でも多かったのは漫画やアニメのことをどう思うかとか、そういう感じの質問でした。先ほども言ったように私は本当に知識がなかったので、逆にどういうアニメがおすすめなのかを聞いて学ぶことが多かったです。あと、その当時は『鬼滅の刃』とかが流行っていたので、それを聞いて実際に私も見ていました。その後、ああ、こういうのが外国から見た時に日本の文化として興味を持つんだなという風に、学ぶことができたと思います。

○**中村** そうなんですね。益本さん、やっぱりアニメとか漫画のことは知っているほうが日本語教育に役立つんですか。

○**益本** そのほうが役立つと思いました。

○**中村** そうということなんですね。『鬼滅の刃』はもう必修ですか。

○**益本** 必修ですね。私も日本語教師始めて、学生があまりにも知識が豊富過ぎてついていけないので見ました、全部。

○**中村** ありがとうございます。すみません、もっといっぱい聞いて話を深掘りしたいところなんですけれども、時間の関係もありますので、このトークセッション



ンについては以上で締めさせていただきたいと思います。じゃあ学生の皆さん、それから益本さん、お話ありがとうございました。

○鹿目 皆様ありがとうございました。

これより休憩に入りたいと思います。では、これより5分間、休憩に入りたいと思います。5分後にまたよろしく願いいたします。